

父との旅で見た様々な
ものについて。

いざかひと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文明社会から少し離れて、不思議な生き物がまだ住んでいる砂漠を旅する少女と父親のお話。

色々なテストのために書いた短文。

目次

父との旅の最中、絶滅危惧種の竜を見る

ことが出来た話

1

父との旅の最中、絶滅危惧種の竜を見ることが出来た話

砂漠、夜。

空を埋め尽くす星の輝きは、まるで宝石を神々がまき散らしたかのようで、幼い私はそれに魅せられるばかりだった。

赤、青、白。ちらちらと瞬き、首をそらしてそれを見る私の顔を、冷たい夜風が撫でた。

「もうそろそろテントへ入りなさい」

父の優しい声が聞こえる。

「こんなに星が多い夜は、竜が通るから」

その言葉にはっとして、私は沈み込む砂に足を取られつつテントへ戻る。

防寒用のローブを纏っている父は、伸ばしたひげを撫でつつ、カセットコンロに鍋をかけ、ミルクを温めている。

それをマグカップに注ぐと、私へ手渡してくれた。顔に熱い湯気がかかる。

「お父さんは竜を見たことある？」

「ああ、何度もあるよ」

父が鍋を毛を編んで作った鍋敷きの上に置いた。

「怖くない……?」

「とつても怖いさ。それはね、竜がとても美しいから」

父は穏やかな声で語る。

「翼が風を切る音がぴゅうぴゅうと聞こえる、それが彼らが来た合図なんだ。

テントから出て、見上げてみれば、星の下を竜が飛んでいる。

胴も足も頭も、磨き上げられた宝石のように透き通った鱗うろこで飾られ、煌めいて

……」

私の頭の中では、父の語っている光景が美しく現れていた。

2対の翼持つ、綺麗な竜。

「あまりにも美しかったから、手を伸ばした。その瞬間……なにが起こったと思う?」

その質問に答えられず、私はマグカップを両手で包み込んだまま、押し黙る。

「体がずぶりと地面に沈み込んだ!」

しまった! 流砂だ! 私は我に返り、大声を出してしまった。

……結果、竜は驚いて逃げてしまった」

私はほっぺたを膨らませた。

「お父さんがおつちよこちよいだっただけじゃない」

「半分はそうだ。でも、もう半分は竜のせいだ！」

父の口調はおどけている。

「さあ、星が目には焼き付かないうちにまぶたを閉じて。

明日も早くに出発だ、寝坊しないように」

そう言われると、子どもでもある私は従うしかない。

この砂漠の旅だって、ずいぶんとわがままを言い、条件付きで連れてきて貰ったのだ。父が課した条件はたった一つ。

『旅の途中、お父さんの言うことは必ず聞くこと』

危ない旅だからこそ、約束を守らなければ。

「お休みなさい、お父さん」

「お休み。明日の目的地は七色のオアシスだ、楽しみにしているんだよ」

毛布にくるまると、電気ランプの灯りが消され、ほの暗さに包まれる。

すーすーと聞こえるのは父の寝息。あつという間に寝入ってしまったようだ。

「……」

そつと起きあがってみても、父は何も言わない。

防寒具代わりに毛布を巻きつけて、テントから抜け出す。

「わあ……」

満天の星空。

「あれ……」

そして、空をよぎる巨大な影。

「……竜だ」

砂地に、竜が翼を畳んで寝そべっていた。

鱗の色は深い青色。頭を細かく動かし、爪や腕や翼を手入れしている。

——その竜と、目があつた。

「……」

竜は私を見る。それだけで、私は動けない。

星の煌めきと、美しい竜の姿が目には焼き付いて。

「……あつ」

竜は飛び立ってしまった。砂が少しだけ舞って、すぐにおさまる。

足元に、何かが転がってきた。

急いで拾い上げ、星空にかざす。

「鱗！」

サファイアを溶かしてから楕円に伸ばし、薄くなるまで叩いたかのような、見事な造形。

重さはほとんど感じず、飴細工のように軽やか。

私はそれを毛布の内にしまい、昔の父みたいに流砂に引っかからないよう、気をつけてテントへ帰った。

父との旅の最中、絶滅危惧種の竜を見ることが出来た話
おわり